

アメリカから見た名古屋空襲(1)

『新修名古屋市史 資料編 近代3』に「米国戦略爆撃調査団資料」（原資料は米国国立公文書館、英文）として、次の資料が掲載されている。

(1)は昭和19年7月という本土空襲に先立つ段階で、米軍が名古屋を中心とした地域をどのように評価していたかを知る手掛かりとなるものである。(2)は昭和20年3月12日の名古屋市街空襲の直前(3月9日)に、搭乗員などに爆撃目標についての情報を周知させるために作成されたと推測される資料である。写真は市史掲載の「三菱重工業名古屋発動機製作所」である。



三菱重工業株式会社名古屋発動機製作所・金属工業所
『勤労と練成』（昭和17年）
名古屋市市政資料館所蔵

(1)名古屋エリアの概要と評価 1944年7月6日

特徴

(前略)

名古屋は、東京や大阪に比して生産量や生産の多角化という点では及ばないが、工業のシステムでは近代化が進み、軍需品でも精密製品の生産は群を抜いている。さらに、ここ5年ないし7年以内の名古屋の急速な工業化はもっぱら軍需生産において展開されており、名古屋エリアが4大工業地帯の一つとされるのは、この点においてである。1937

年頃までは、名古屋は主として織物、機械類や工作機械、航空機、銃砲類、食品、陶磁器、鉄道車両、特殊鋼、時計、化学製品の生産地として重要であった。その後、航空機や工作機械、銃砲類、特殊鋼、電気機器、化学製品の生産がめざましく発展した。同時に近隣の都市に、自動車や発動機、非鉄金属、減摩軸受、鉄鋼、工作機械、航空機の工場が新設された。このエリアの生産システムの最大の特徴は、航空機生産での集積度の高さにある。

(2)目標情報シート一名古屋都市工業エリア 1945年3月9日

機密 戦闘任務の際は機内に持ち込むべからず

1 位置と特徴

名古屋は日本本土で2番目の大きさの濃尾平野の南端に接する足のような形をした伊勢湾の爪先の位置にある。伊勢湾の踵の下あたりからずんぐりした大きな半島が東の方に突き出しており、もう一つの長くてほっそりした半島が名古屋から南の方に伸びて、この奥行のある湾の東の境界線を形づくっている。肥沃な濃尾平野を3000~4000フィートの山々が取り囲んでいる。またこの平野はデルタ地帯になっており、周囲の山々から大小の河川が流れこんでいる。狭くて凸凹の多い形をした港湾地帯をもつ名古屋は、

東部で低い山々の間に押し込められており、屈曲した庄内川が市街の北部と西部を包み込むように流れている。いくつかの大きな運河と短い堀川が市街の南部で交差している。

名古屋の「目標地域」と定められた地域は、東と南東を中央線で区切られた三角形をした中心の核となる部分である。東海道本線は目標地域の西と南西部分を形づくっている。広大にして著名な名古屋城は目標地域の主要部分の北端に位置する。城と東海道線に挟められた部分は、かなり建て込んだ地域で、攻撃対象の北の張り出し部分である。目標地域の大体の規模は端から端までおよそ 3 マイルである。

2 目標の説明

a. 概況

この地域は名古屋のなかでも焼夷弾攻撃に対して最も脆弱な地域であり、人口密度も最高で、名古屋全体では 1 平方マイル当たり 22,000 人であるのに対して、75,000 人に及んでいる。このゾーンは都心の商業地域及び市政の中枢部を含んでいる。またこのゾーンは、レンガ造りや石造りの背の高い公共建築物や、概して近代的な耐火構造をもつ大きな百貨店、事務所、銀行、その他の事業所などが集中している地区として特徴づけられるが、これらの建物のまわりには燃え易い密集した家屋の群れがひしめいている。このゾーンの南の部分には、とくに運河の堤に沿って数多くの小さな工場が点在している。

(続く)

(2015 年 7 月 6 日)